中国における盆景樹形整姿技術の変遷と発展について

The Change and Development of Training Techniques in Bonsai (Potted Trees) in China

李 樹華*
Shuhua Li

摘要：1971年陝西省乾県で発掘された唐の章懷太子李賢の墓の東壁に残る壁画に見られる盆景により、中国盆景は少なくとも1300年の歴史のあることがわかる。それ以来現在まで、盆景植物材料の増加と樹形の変化につれ、整姿技術と道具・材料、即ち樹形を作る手法は、各時代ごとに異なってきた。本稿では多数の関連ある文献・絵画資料を収集・分析し、その整姿技術、なかでも最も重要な剪定と掛け技術の変遷と発展について検討し、明らかにしようとするものである。唐・宋及び元時代には縄掛け・剪定・芽摘みが現れた。明・清時代には棕櫚縄掛け・針金掛けが現れた一方、多様の剪定方法が総括された。民国時代からは現在の技術とあまり変らない。

1. はじめに

樹木盆景（盆栽）の矮化は、自然界に生長している樹木が遺伝・地上部の環境・土壌条件などの因子によって矮化されるのとは異なり、限られた鉢土の中で、特に人為的整姿技術を用いて行われる。現代盆景の整姿技術には剪定、針金掛け、芽摘み、彫刻及び誘引などがあるが、これは盆景樹形を造型して美観を増し、これを保つことを目的に行う手法である。ところで盆景は唐の章懷太子・李賢の墓の東壁に残る壁画に描かれていることから、千三百年前にはすでに存在していたといえる。したがってこれらの整姿技術は少なくとも千三百年の年月をかけて改良が加えられ、発展してきたものである。この発展過程に関する研究は、盆景樹形整姿技術の変遷を明らかにするだけではなく、造園木の整姿技術をもある程度明らかにできると考える。だが、中国あるいは日本においても、中国における盆景樹形整姿技術の変遷に関する研究報告及び研究論文は未見であり、この問題はまだ明らかにされていない。従って、本稿はその変遷と発展の過程について考察したものである。

続いて多数の関連ある文献を分析して、盆景樹形整姿技術の形成・発展・成熟及び整姿技術によって各流派が派生した現在の状況について検討したい。

2. 隋時代以前における整姿技術の形成

古代の思想家・教育家である孔丘（B.C.551～B.C.497）について記された『孔子家語』『困誓解』には「夙興夜寝，耕耘樹芸，手足胼胝，以養其親。」¹⁾とある。すでに「樹芸」という言葉が2500年前の春秋時代に出ているのである。これは果樹、林木を栽培する作業を指す²⁾が、恐らく整姿技術もその作業内容の一つだったであろう。

後漢（25～220）に崔寔の著した『四民月令』は、総合的な農書で、その中に「正月尽二月，可剥樹枝。」³⁾との記述がある。「剥」は取り除くの意味で、現在の剪定の意味である。これは中国における樹木の剪定に関する最初の記録である。また、後魏（386～556）には賈思勰が『齊民要術』を著した。この本は中国において最初の完全な農業全書であるだけでなく、世界における最も早い系統的・科学的な農業名著である⁴⁾。その中の「卷第四・園籬第三十一」には「……至明年春，剥去横枝，剥不留距。剥訖，即編為籬，隨宜夾縛，務使舒緩。又至明年春，更剥其末，

又復編之，高七尺便足。」⁵⁾の記述がある。文中にある「剥」は上記のものと同じく剪定の意味である。「夾縛」は生垣の形をつくるために、縄を枝に掛けて固定する意味である。本文から生垣をつくる際、剪定と縄掛け技術を使用したことがわかる。

従って、隋時代（581～618）以前には、盆景の整姿技術を記録した文献は、まだ見られないが、上記のような林木・果樹・生垣の剪定と縄掛け技術は既に現われており、後の盆景整姿技術形成の基礎となった。

3. 唐、宋及び元時代における整姿技術の発展

唐時代（618～907）に盆景に使われた植物材料は1種、宋時代（960～1279）には7種、元時代（1206～1368）には7種ある⁶⁾。この三時代は盆景整姿技術の発展期である。

（1）小松と盆松の整姿技術

（i）唐時代における小松の剪定と麻縄掛け

唐時代になると文人らの間では小松を愛でる風潮が起こり、多数の小松を歌う詩が書かれた。その中の代表的なものは李賀の「五種小松歌」⁷⁾、李咸用の「小松歌」⁸⁾及び皮日休の「小松」⁹⁾などである。詩の中に詠頌された小松の樹形は次の特徴を持っている。(a) 高さが矮小である。「小松」には「婆娑只三尺」，「小松歌」には「短影月斜不滿尺」と記されている。小松の高さはただ三尺と一尺たらずである。(b) 姿が怪奇である。「五種小松歌」には小松の姿が「蛇子蛇孫」とたとえられ、よく曲がった幹と枝をもっている。「小松」には小松の姿が「陰円小芝蓋」とたとえられ、小松がキノコの形をしている。(c) 葉が壮健・濃緑である。「五種小松歌」には「緑波浸葉滿濃光」と記されている。また、「小松」には「葉健似虬須」とあり、小松の葉が龍のヒゲのようになっている。

このような樹形・樹高を維持するために、剪定と麻縄掛けによる樹形の矯正が行われた。(a) 剪定。「五種小松歌」には「細束龍髯鉸刀剪」。「小松歌」には「天人戲剪蒼龍髯」とあり、小松の枝葉、を龍のヒゲを摸して剪定したことがわかる。また、「鉸刀」はハサミの意味である。当時、植木の剪定バサミが現れた可能性がある。(b) 麻縄掛け。「小松歌」には「貞心不為麻中直」とある。この詩句から小松が麻縄掛けて整姿されたことがわかる。小松は盆景ではないが、その姿・形が盆松に類似するため、小松に行われた剪定と麻縄掛け技術が、盆松あるいは他の盆景の整姿技

*京都大学大学院農学研究科

術の発展に影響を与えたのであろう。

(ii) 宋時代における盆松の整姿

台湾の故宮博物院に保存されている南宋の著名な画家である劉松年の「十八学士図」は、唐太宗（597～649）が文学館を起こした時に命名した十八学士を題材として描かれた作品である。図の左前方には、大理石で造られた蓮の花形の台座の上に一つの盆松が飾られている。この松は自然の樹形ではなく、やや大きいボケ形の鉢に植えられ、根元から樹芯まで次第に細くなり、S字形に曲げられている。また、幾つかの枝が水平、或はやや下がりぎみに伸ばされている。この幹と枝の曲げは縄掛けで整姿したものであると考えられる。小枝・葉は壮健ですっきりしているところを見ると、剪定されたのであろう。従って、この盆松は剪定と縄掛けで整姿されたと推測できる。

(2) 盆梅の整姿技術

宋時代の何応龍は梅盆景を歌って、「和花翁¹⁰⁾ 盆梅¹¹⁾」詩を書いた。詩の前半は次の通りである。

絶澗移来近市園， 又還移入賣花盆。
体蟠一簇皆心匠， 膚裂千梢尚手跡。

この詩句には、梅を山から移してきて鉢に植え、整姿したことが記されている。「体蟠」は盆梅の幹・枝が曲がっている意味で、縄掛け技術が行われたことを示す。「膚裂」は蒼老感を表現するため、幹の皮に傷ついたり、穴をあけたりし、人工的に彫刻を行なったことを示す。「皆心匠」と「尚手跡」は整姿した跡が盆梅に残っていることを示す。宋時代から、盆梅に整姿することが始まったことがわかる。

また、元時代に盆梅の整姿が行われたことは、釋明本（1263～1323）の「盆梅¹²⁾」にも記述されている。

盆 梅

月团香雪翠盆中， 小枝能偷造化工。
長伴玉山頽錦帳， 不知門外有霜風。

「小枝能偷造化工」にある「造化」は大自然の意味で、「偷」は盗むの本意であるが、ここでは整姿されたことを示す。

(3) 盆榴（ザクロ）の剪定と芽摘み

(i) 宋時代における盆榴の剪定

宋時代から、ザクロは花果類盆景の主な植物材料になってきた。宋の呉樞が著し、元の張福が補足した『種芸必用及補遺』には「種盆榴法：・・・春暖，放露磚石上；如長嫩苗，隨意剪去，勿令長大。」¹³⁾と記されている。初春，天氣が暖かくなると、盆榴の芽の生長が早いので、その芽を随時剪定して生長し過ぎるのを

抑え、樹形を保つ。これは盆景の剪定技術を明記した最初の文献である。

(ii) 元時代における盆榴の芽摘み

芽摘みは盆景樹木の樹芯部や枝の徒長をおさえるために行う手法である。芽摘みの手法についての記事は元時代に初めて現われた。即ち、元の『居家必用事類』の「種盆内花樹法」には、盆景や鉢植えの鉢土の作り方、水のやり方及び肥料の施用方法などが記録されている。また、盆榴の芽摘みに関して次のように記述されている。「如石榴花，日中常晒，日午澆清水，早晚亦澆。若有嫩芽長起，便与捻去心。」¹⁴⁾「捻」は指先で物をつまむという意味で、「心」は若い芽で、「捻去心」は芽摘みの意味である。

(4) 盆竹の独特な整姿技術

元時代には、竹盆景には独特な整姿技術が行われた。李衍の著した『竹譜詳録』には吊根竹と球形竹盆景の作り方が記されている。

(i) 吊根竹盆景の釣り糸掛けと柱誘引法

吊根竹盆景は、竹の子が芽ばえ伸びようとする時、軟らかいうちに、細い木と竹の柱及び釣り糸で誘引して曲げ、色々な曲線になるようにしたものである（図-1 吊根竹）。『竹譜詳録』にはこの方法を次のように記述している。「吊根竹又名扶根竹，出温州沿海山中。蓋取釣糸，竹根上有小枝葉者，漸漸出土，移入盆欄中，以竹枚扶持懸起，為几案之玩。」¹⁵⁾文中にある「釣糸」は釣り糸、「竹枚」は細い竹、「扶持懸起」は誘引と掛けのことである。これは盆景整姿の柱誘引法に関する最初の記録である。

(i) 球形竹盆景の剪定法

また、『竹譜詳録』には「球竹每於杭州街市人家見之，植盆欄中，高不過一二尺，独竿上叢密，別無種類，人力為之。以筍初解籜時，折去上梢，則竿杪雖出，小枝無數。三二年後，枝葉轉密，盤葉圓圓，如球之狀。繁細可愛，故名。」¹⁶⁾と記している。タケノコが芽ばえ伸びようとする時、矮化するために筍の皮を取り除き、また、数多くの小枝が出るように芯を折り除くと、2～3年の後、竹が球状になる（図-2 球形竹盆景）。

4. 明・清時代における整姿技術の成熟

明時代（1368～1644）・清時代（1616～1911）には、盆景に使われた植物材料は急に増加し、それぞれ50余種、70余種を数える¹⁷⁾。また、盆景の整姿技術、特に剪定と掛け技術は成熟し、現在のに接近している。一例として、清の劉鑾の『五石瓠』（『屑玉叢譚』『三集』収録）には「今人以盆盎間樹石為玩，長者屈而短

図-1 元時代の吊根竹盆景元・李衍『竹譜詳録』「卷五」より

図-2 元時代の球形竹盆景元・李衍『竹譜詳録』「卷五」より

之、大者削而約之、或膚寸而結果実、或咫尺而蓄虫魚、概称盆景」と記されている。盆の中にある樹は長いもの（枝）を曲げて短くし。大きいものを剪定して縮める。これは盆景の整姿技術に関して簡潔にまとめられたものである。

（１）整姿の必要性に関する論説

盆景は生きている芸術品であり、健全な生長を保持しつつ理想的な樹形にするためには、人工的な整姿を行わなければならない。清の初期に陳淏子は『花鏡』に「諸般花木、若听其発幹抽条、未免有礙生趣。宜修者修之、宜去者去之、庶得条達暢茂有致。」¹⁸⁾と整姿の必要性に関して論述した。文中にある「条達暢茂」は花木が健全に生長する意味、「生趣」と「有致」は樹形が美しく、雅致があるという意味である。さらに、清の宮廷画家である鄒一桂は、樹形の画意と観賞の視点から剪定の必要性を論述した。「凡化¹⁹⁾之入画者、皆剪裁培植而成者。菊非刪植則繁衍而潦倒；蘭非服盆、則葉蔓而從横。嘉木奇樹皆由裁剪、否則枝極不成景矣。」²⁰⁾文中にある「成景」とは一つの風景になるということであるが、それは樹形が蒼老・雅致・怪奇及び秀美であってはじめて可能なのである。例えば、蒼老は蟠幹、雅致は直幹、怪奇は懸崖、秀美は文人木のような樹形の趣を表す。

（２）剪定技術の総括

唐、宋及び元の各時代には、剪定技術は着々と発展し、明の万暦年間（1573～1615）には剪り除く忌み枝について総括した記述が現われた。周文華の『汝南圃史』には「諸般樹木整頓尤須得法、去瀝水枝（向下者）、去刺身枝（向內者）、駢紐枝（連結者）、冗雜枝（多乱者）、風枝（細長者）、旁枝（新発者）。」²¹⁾と記述されている。「瀝水枝」は下向き枝、「刺身枝」は内向き枝、「駢紐枝」は交差枝、「冗雜枝」は乱れ枝、「風枝」は徒長枝、「旁枝」はヤゴである。これらの枝は現時点で、或は将来、鑑賞の上で美しさを損ねる枝で、忌み枝で、特殊な場合を除いて剪除するのが普通である。

さらに、陳淏子は忌み枝の定義、樹形を損ねる枝及びこれらの枝を剪定する方法に関して次のように総括している。「凡樹有瀝水條、是枝向下垂者、当剪去之；有刺身條、是枝向裏生者、当断去之；有駢枝條、兩相交互者、当留一去一；有枯巧條、最能引註、当速去之；有冗雜條、最能礙花、当折細弱者去之。但不可用手折、手折恐一時不断、傷皮損幹。粗則用鋸、細則用剪、截跡須向下、則雨水不能沁其心、木本無枯爛之病矣。」²²⁾文中にある「條」は枝の意味である。なお上記文献の内容は枝の種類が違うとその剪定方法が異なるというものであり、具体的には以下のとおりである。「瀝水條」は剪り除くべきである。「刺身條」はぜひ剪り除く。「駢枝條」は枝が互に交わるため、一つを残し、一つを剪り除く。「枯巧條」は有害病虫を生ずるため、速く剪り除く。「冗雜條」は花芽の形成を妨げるため、細く弱い枝を選んで剪り除く。

（３）棕櫚（シュロ）縄掛け

図－３ 明・朱有燠撰。蔡佐佐画『菊譜百詠図』『花器』にある棕櫚糸

棕櫚（シュロ）縄掛けの目的は、腕伸びした枝を引き寄せて短くしたり、立ち上がる枝を伏せるなどして樹形を整えるものであり、明時代から盆景を整姿する場合盛んに行われた。

明の王鏊は『姑蘇誌』に「栝子松、雖産他郡、而呉中為多、故家有逾百年者、或盤結盆盎、尤奇；亦可沈子而生。又有檜樹、亦可盤結、二種皆可供庭除之玩耳。」²³⁾と記す。文にある「盤結」は棕櫚縄掛けで栝子松（白皮松、和名：サンコノマツ、Pinus bungeana²⁴⁾）と檜樹（円柏、イブキ、Juniperus chinensis）の樹形を整姿する手法であろう。また、清の『花鏡』には「如樹服盆已久、枝幹長野、必須修枝盤幹。・・・須以極細棕索縛吊、歳久性定、自饒古趣矣。」²⁵⁾とある。「棕索」は棕櫚縄、「縛吊」は掛けである。ここには棕櫚縄掛け技術を明記している。従って、棕櫚縄は当時の造園屋、花屋及び盆景屋に必要なものであった。明の『汝南圃史』には「棕縛花枝、紋細繩扎竹屏欄、粗繩扛樹坎、盆石、雖經雨不朽爛、園圃中最不可缺此。」²⁶⁾『花鏡』には「棕櫚製為繩索、縛花枝、竹屏架、雖經雨雪、耐久不爛、園圃中極当多。」²⁷⁾とそれぞれ記述している。「棕縛花枝」と「棕櫚製為繩索、縛花枝」も棕櫚縄掛けの意味である（図－３ 「花器」にある棕櫚糸）。

当時最も重要な盆景材料の天目松（Pinus taiwanensis）を次のように整姿している。「如最古者、品以天目松為第一。惟杭城有之、高可盈尺、其本如臂、針毛短簇。結為馬遠之欹斜結曲、郭熙之露頂攫拿、劉松年之偃亞層疊、盛子昭之拖拽軒翥等状、載以佳器、槎齒可觀、他樹蟠結、無出此制。」²⁸⁾文中にある馬遠、郭熙、劉松年及び盛子昭は中国歴代の著名な画家で、「欹斜結曲」、「露頂攫拿」、「偃亞層疊」及び「拖拽軒翥」はそれぞれの画家が樹木を描く技法である。「結」と「蟠結」は棕櫚縄掛けのことである。この文献から、明時代には盆景に棕櫚縄掛けをする際、画家の画樹法を倣照して行ったことがわかった。上記の方法で整姿された松盆景は現代の中国盆景と日本盆栽に通ずる感興を起こさせる（図－４ 明時代の『十八学士図』にある松盆景）。この整姿方法は現在でも中国の一部の盆景の産地、例えば杭州・揚州及び四川などの省市で使用されている。

（４）針金掛け

アヘン戦争後、フランスは通商交渉のため、当時の清に使節団を派遣した。この使節団は、広東の街頭と当地にある政府官邸の庭で初めて果樹と林木の盆景を見だして、心から奇異に感じたようである。使節団の一人である M. Renard が抱いた盆景の印象とそこで見た整姿技術について「Chinese Method of Dwarfing Trees」と題して 1846 年 11 月 21 日付の『Gardeners' Chronicle Vol. 6』に掲載されている。この文の最後の一節に「On some dwarfed trees that were sent to Her Majesty from China, in addition to the inflictions described in the account, were found numerous ligatures of wire, and the branches twisted and bent by the agency of the same material.」²⁹⁾と記述されている。文中にある「ligatures of wire」は針金掛けの意味である。本稿は 1846 年に掲載され、当時の盆景に針金掛け技術が行われていたことがわかる。これはこの整姿技術に関する最初の記録であろう。

『盆栽大事典』の「針金掛け」一節には、日本の針金掛け技術の歴史に関して「針金掛けが最初に行われたのは明治中期に入ってからで、東京に住む某氏（氏名不詳）が開発したものと伝えられている。当時は鉄線によって作業されたものと想像され、銅線を用いるようになったのは、大正に入ってからであろう。」³⁰⁾と記されている。この記述から、中国で盆景に針金掛け技術が行われたのは、少なくとも日本より数十年程度早かったことがわかる。

針金掛けは、棕櫚縄掛けより整姿効果がよく、手数が簡便で操作時間も節約できるため、後世の民国（1911～1949）及び現在で

も盛んに使用されている。民国二十年(1931)に出版された『花卉盆栽法』には「懸崖式之整形、幹部可用鉛糸、稍稍屈曲、移植于床地較高之处、使樹幹向外方懸垂。」^[31]と亜鉛びきの針金での懸崖盆景の整姿法が記されている。また、十九年(1930)に出版された『木本花卉栽培法』には「盆栽家尤多採用銅糸曲枝法、以其法簡而易達目的也。」^[32]と銅線掛けについて記述されている。

(5) 太い幹、枝を曲げる技術

太い幹、枝を曲げるのも盆景樹形整姿技術の一つである。『汝南圃史』には「如盆中樹欲其曲折、略割其皮、隨着輻摺、以棕縛之、自饒古意。」^[33]とある。曲げたい部分の皮を傷つけて曲げやすくしてから、棕櫚縄で誘引・掛けを行うと、太い幹、枝を整姿することができる。さらに、『花鏡』には「如樹服盆已久、枝幹長野、必須修枝盤幹。其法宜穴幹納巴豆、則枝節柔軟可結；若欲委曲折枝、則微破其皮、以金汁一点、便可任意輻摺。」^[34]とある。「巴豆」はトウタイグサ科のハズ(Purging croton)で、常緑小高木で、種子は下剤に用いられる。「金汁」は糞尿の清汁である^[35]。盆樹の幹、枝に穴をあけて、「巴豆」を入れたり、傷の処に「金汁」を塗ったりすると、幹、枝を曲げやすくなるとある。しかし筆者はこれに対して実験したことはないが、あまり科学的根拠はないと考える。

(6) 切り跡の処理及び生苔技術

幹、枝の切り跡はそのままにしておくと、不自然に感じられるので、処理しなければならない。清初の巢鳴盛の『老圃良言』には「仍將大枝截去、以蜜塗之、虫巢其上、自饒古意。復以馬糞和泥、掩其潤处、或用魚腥水澆之、便生青苔、尤助野趣。」^[36]とある。切り跡にハチミツを塗ってアリを誘い齧らせて、自然のままのようにしたものらしい。さらに、苔を生長させて、蒼老感を作り出すことができる。上記した「Chinese Method of Dwarfing Trees」にもこの方法を詳しく記録している。「They raise with a knife the bark near these notches, and introduce in the one honey, in the other sugar, in some colors, and even acid. Attracted by the smell, thousands of ants and flies come and gnaw, and prick the bark of the tree, while on the other side the acid burns and destroys wherever it touches. At length, after this treatment, when the branch has become a veritable monstrosity, covered with lichens, lumps and deformities.」^[37]この方法はある地域にまれに使われている。

(7) 盆景樹形の整姿しすぎに反対する風潮

限られた小鉢の中に樹を植えると、心が押えつけられるように感じる人がいる。また、鉢中の樹を整姿しすぎると、不完全な病態の形となり、観賞者の心地をわるくするため、清時代から、整姿しすぎに反対する風潮、或は反盆景論が起ってきた。

李漁の『笠翁一家言』『居室器玩部』には「予性最癖、不喜盆中之花、籠中之鳥及案上有座之石、以其局促不舒、令人作鸞鷟之想。」とある。盆景、鉢植え、かごで鳥を飼うこと、かめで魚を飼育すること及び置き台のある研山などは、窮屈で心地よくなく、束縛されている感じがするため、李漁はこれらのものが好きではなかった。また、沈復の『浮生六記』には「至剪裁盆樹、……若留枝盤如宝塔、扎枝曲如蚯蚓者、便成匠氣矣。」と記されている。本文の大意は次のとおりである。盆樹の枝順、長さ及びひらきは規格化したものになってしまい、寺の塔のように、また枝の曲げはミミズのようにしているので、この盆景というものは不自然で、創造力のとばしい作品である。

さらに、龔自珍(1792~1841)は『病梅館記』を書き、晩清の腐敗政治をかたわの盆梅にたとえて批判する一方、当時の盆景を激しく批判した。まず、龔は天下の盆梅が全部病氣・ばげものであるとした。「或曰：梅以曲為美，直則無姿；以欹為美，正則無

図-4 明の『十八学士図』に見られる松盆景

景；梅以疎為美，密則無態。……又不可使天下之民斫直，刪密，鋤正，以妖梅病梅為業，以求錢也。」続いて、彼は天下の病梅を治めることを誓った。「予購三百盆，皆病者，無一完者。既立之三日，乃誓療之，從之，順之，毀其盆，悉埋於地，解其棕縛。以五年為期，必復之全之。」龔自珍は300の盆梅を買って、鉢を壊して、掛けている棕櫚縄を解かせて、露地に植え、梅を自然のように健全に生長させようとした。盆景樹形の整姿のしすぎに反対する清代の風潮が、それ以後の自然な樹形をめざす盆景の整姿技術にある程度影響を与えたのであろう。

5. 現代における整姿技術による盆景流派の形成

現代は、盆景の最盛期である。1970年代からは高い地位になってきた園林の一分野として、歴史がある新しい学科といわれている。盆景の樹木材料として約200余種が使われており、その中には松柏類は37種、花果類は68種、雜木類は57種及びツル類は17種ある^[38]。特に、整姿技術の発展によって五つの流派：嶺南派、四川派、蘇州派、揚州派及び上海派が形成された。

(1) 流派形成の基礎

盆景流派の形成された原因は次のとおりである。(a) 中国は国土が广大で、各地域で原産樹種が異なり、各地ごとに盆景に使われた樹種が違う。(b) 盆景に異なる樹種を使うことによって、独特な整姿技術が形成されてきた。(c) 過去の時代は、交通不便のため、盆景屋、花屋の間の交流がなく、各地ごとの整姿技術はそのまま受け継がれてきた。従って、流派は盆景の発展のある歴史段階の産物として出来たものといえよう。

五つの流派は70年代後期から80年代初期までに総括されたが、各地ごとに独特な整姿技術が初めて形成されたのは清時代であった。(a) 「Chinese Method of Dwarfing Trees」には広東盆景の剪定方法が次のように記されている。「At the same time they prune the tree of its handsomest branches, only preserving those which are zigzag.」^[39]文中にある「zigzag」は「Z」の形にしている意味で、中国語でいえば「之」である。この剪定方法はちょうど嶺南派の代表的技術の「截幹蓄枝法」^[40]である。(b) 蘇州人の沈復の『浮生六記』には「至剪裁盆樹，先

表－１ 各流派ごとの代表的な地域、樹種、整姿技術及び樹形

流派名称	代表地域	代表樹種	技術類別	整姿技術	代表樹形
嶺南派	広東省 広西省 福建省	クロイゲ、アキニレ 九里香（中名）、 福建茶（中名）	剪定だけ	截幹蓄枝は剪定法で、幹を切って側芽を芽ばえさせてから、この枝を蓄えて幹をおさえる。この技術を繰り返す。小枝も同じ方法で作る。枝は折線になり、力感を持つ作品である	大樹形 高聳形 自然形
揚州派	江蘇省 揚州市	マツ類、アキニレ、 イブキ、ツゲ類	棕欄繩掛け、 剪定	揚棕、底棕、平棕、 掛棕 、連棕、靠棕、揮棕、吊棕、套棕、拌棕、及び縫棕などの十数種の棕欄繩掛けの方法。また、枝と葉が薄く雲形片になる	雲片式、 虎形 式（幹は軟らい時、結び目を作った樹形）、自然式
蘇州派	江蘇省 蘇州市	アキニレ、カエデ ウメ、クロイゲ	剪定と棕欄繩掛け	典型的な技術：六台三托一頂（左右に枝が六段、前枝三段、頭と全部で十段の枝で美しい樹形を作るもの）	六台三托一頂、陣子式、垂枝式、劈幹式
四川派	四川省 成都市 重慶市	マキ、ヒメカキ イチヨウ、ボケ ハクチョウゲ	棕欄繩掛け、 剪定	掉拐、三弯九道拐、滾龍抱珠、对拐、方拐、大弯垂枝、接弯掉拐などの幹の弯曲の仕方は剪定法と合せて各種の形式を作り出す	直身加冕、老婦梳妝などの規則樹形が多い
上海派	上海市	多種	剪定と針金掛け	樹種材料の特性によって整姿する（日本盆栽と大体同じ）	自然樹形、多種多様

取根露鶏爪者、左右剪成三節、然後起枝。一枝一節、七枝到頂、或九枝到頂。」と記述されている。この剪定方法と樹形は、現在蘇州派盆景の代表的な技法と「六台三托一頂」⁴¹⁾の樹形である。(c)嘉定は上海市の近郊県の一つであり、明時代における嘉定県の朱小松、朱三松の盆樹の整姿技術及び清時代に継承された盆樹の流行は上海派の成立に対して多大な影響を与えたと考えられる⁴²⁾。

ところで、明の末期に高濂の『高子盆景説』には「盆景之尚天下有五地最盛，南都，蘇松二郡，浙之杭州，福之浦城，人多愛之，論植⁴³⁾以錢万計，則其好可知。」⁴⁴⁾と記されている。「南都」は南京，「蘇」は蘇州，「松」は上海にある松江である。この文献から明，清時代には盆景が盛んに流行していた地域は南京，蘇州，上海の松江県，杭州及び福建省の浦城などであったことがわかる。そしてこれらは大体五つの流派の代表地と一致している。

(2) 整姿技術によって形成された盆景流派

表－２ 中国における現代盆景の整姿技術及び樹形の比較

流派	代表的な樹形	整姿技術
嶺南派	自然式樹形	剪定だけ
揚州派	一寸三弯	規則式樹形
南通派	兩弯半	
四川派	拐弯	
安徽派	遊龍弯	
蘇州派	半規則式樹形	棕欄繩掛け 剪定
上海派	自然式樹形	針金掛け 剪定

(i) 嶺南派

嶺南地方は亜熱帯の広東省，広西省及び福建省を含み，気候が温暖なので，樹木に強い発芽力がある。嶺南盆景はこの強い発芽力を利用して鋏作りの技法だけを用いて盆景を整姿する。清代に形成された「截幹蓄枝法」という枝を蓄えて幹を抑える技術，剪定法で姿を作っている。「大樹型」・「高樹型」及び「自然型」などの典型的な盆景樹形がある。嶺南派は「蒼勁自然」の芸術効果を求めている。

(ii) 蘇州派

清代に形成された「六台三托一頂」は蘇州盆景の代表的な樹形である。これは左右に枝が六段，後側に枝三段，梢と全部で美しい樹形を作るものである。剪定，棕欄繩掛けと針金掛けの技術によるもので，その樹形は根の芸，立上げに幹の変化を重んじ，樹冠の大きな作りである。蘇州派は「清秀古雅」な芸術効果を求めている。

(iii) 揚州派

雲片作りといわれ，枝と葉が薄く雲形片になるように棕欄繩を枝に掛け，葉が平らになるように作る。揚州派は「嚴整壯觀」な芸術効果を求めている。

(iv) 四川派

四川派は曲折した幹が特徴で「遊龍抱珠」即ち，龍が珠を抱いて遊ぶというように形容されており，「虬曲多姿」な芸術効果を求めている。

(v) 上海派

上海派は自然な枝振り，厳しい自然に耐えた老樹の風格を求めるもので日本の盆栽に近い。日本盆栽から強い影響を受けたと考

表－３ 中国における盆景樹形の主な整姿技術の変遷過程

えられる。

各流派ごとの代表地域、樹種、整姿技術及び代表樹形は表-1に総括した、また、各流派の整姿技術と樹形の比較は表-2のように示した。

6. 結語

上記の盆景樹形整姿技術の変遷と発展について検討し、次の結果を得た。

1) 盆景の整姿技術は剪定、芽摘み、棕櫚縄掛け、針金掛け、彫刻、または、ハチミツ・砂糖・染料・さらに酸さえもすり込み、多くのアリやハエを集中させて樹皮をかじらせ穴をあけさせる方法などがあるが、剪定、縄掛け及び針金掛けは盆景の最も重要な整姿技術であり、それらの変遷過程が表-3の如く詳しくわかった。

2) 盆景樹形整姿技術の変遷は、隋時代以前は盆景の形成期、唐・宋及び元時代は盆景の発展期、そして明・清時代は盆景の成熟期

であるという考えが支持され得る結果を得た。

3) 盆景は蒼老、秀雅及び怪奇など、美観を持つ樹形を保つために、整姿しなければならないが、一方、生命力があり、健全な状態に生長させるためにも適切な整姿を行うことが非常に重要である。

4) 盆景樹形整姿技術は、現代社会においても、更に発展する可能性がある。これから、電気器具、化学整姿法などの技術が応用されよう。例えば、木彫機による幹・枝の彫刻、エチレン(植物ホルモンの一種)を用いた芽摘みなどである。そして、整姿技術によって形成されてきた盆景の流派も更に発展が期待される。

5) (細い竹。木の) 柱誘引という整姿技術は、安徽省歙県売花漁村、北京市豊台花郷などの伝統的な植木、盆景の産地では、遅くとも明時代から現在に至るまで、特に松柏類、花果類によく使っている。しかし、現在までこのことを記す文献は、元時代の竹盆景の「竹誘引法」以外には、まだ見出すことができない。従って、これは今後の研究課題とするものである。

補注及び参考文献

- 1) 1) 春秋：孔丘：孔子家語・困誓解
- 2) 諸橋轍次(1957)：大漢和辞典：大修館書店、巻六、540
- 3) 後漢：崔寔：四民月令・正月
- 4) 後魏：賈思勰原著、繆啓愉校釋(1982)：齊民要術：農業出版社
- 5) 同上書・巻第四・園籬第三十一
- 6) 筆者が行った中国における盆景の植物材料に関する資料調査による。唐時代は蘭(石盆景)、宋時代はウメ・マツ・金モクセイ・カイドウ・ザクロ・バショウ及びセキショウなど、元時代はウメ・ホウオウチク・砂竹(中名。下同)・瀟湘竹・姜竹・公孫竹・黄金間碧玉及びセキショウなどである。
- 7) 唐：李賀：五種小松歌：全唐詩、巻三百九十三
- 8) 唐：李咸用：小松歌：全唐詩、巻六百四十四
- 9) 唐：皮日休：小松：全唐詩、巻六百九
- 10) 花翁、宋の孫惟信の号である。
- 11) 宋：何応龍：橘潭詩藁・和花翁盆梅
- 12) 元：馮子振、釋明本：梅花百詠・盆梅
- 13) 宋：吳惲撰、元：張福補：種芸必用及補遺・種盆榴法
- 14) 元：佚名：居家必用事類・種盆内花樹法
- 15) 元：李衍：竹譜詳録・巻五

- 16) 同上書
- 17) 筆者が行った中国における盆景の植物材料に関する資料調査による。明時代に新たに加わったのは、松柏類では黄山松・サンコノマツ及びイヌマキなど7種(品種を含む、下同)、花果類ではヒメザクロ・虎刺(アリドオン)・オウバイ及びシナフジなど25種、雑木類ではハルニレ・ツゲ・イチヨウ及びギョリュウなど10種、草類ではオモト及びカンナなど5種である。清時代に新たに加わったのは、松柏類では五葉松・スギ及びナギなど6種、花果類では九里香(中名)・エニシダ及びロウバイなど13種、雑木類ではトウカエデ及びガジュマルなど5種、草類では七玄草など2種である。
- 18) 清初：陳淏子：花鏡・巻二・課花十八法・整頓刪科法
- 19) 化、古代には花と通じる。
- 20) 清：鄒一桂：小山画譜
- 21) 明：周文華：汝南園史・巻之二
- 22) 同前掲 18)
- 23) 明：王鏊：姑蘇誌・巻十四・土産
- 24) 北村四郎等(1971)：原色日本植物図鑑：保育社：木本編(Ⅱ) 369
- 25) 同前掲 18)・巻二・種盆取景法
- 26) 同前掲 21)・巻之十一
- 27) 同前掲 18)・巻三・花木類考

- 28) 明末：高濂：遵生八箋・高子盆景說
- 29) 「Chinese Method of Dwarfing Trees」：1846年11月21日『Gardener's Chronicle Vol.6』
- 30) 日本盆栽協会(1983)：盆栽大事典：第3巻、91：京都同朋舎
- 31) 民国二十年(1931)：夏詒彬：花卉盆栽法：上海商務印書館、16
- 32) 民国十九年(1930)：周宗璜、劉振書：木本花卉栽培法：上海商務印書館、82
- 33) 同前掲 21)
- 34) 同前掲 18)
- 35) 伊欽恒(1962)注：花鏡：69：農業出版社
- 36) 清初：巢鳴盛：老圃良言
- 37) 同前掲 29)
- 38) 中国盆景編輯委員会(1988)：中国盆景——佳作賞析与技芸：安徽科学技術出版社、194~206
- 39) 同前掲 29)
- 40) 次の(2)部分の表を参照。
- 41) 次の(2)部分の表を参照。
- 42) 明：王鳴韶：嘉定三芸人伝、清：陸廷燦：南村隨筆、清：程庭鸞：練水画征録及び康熙嘉定県誌。
- 43) 植、古代には値と通じる。
- 44) 同前掲 28)

Summary : Chinese Bonsai (potted trees) have at least 1300 years' history. To shape dwarf trees into artistic forms, training is always necessary. A number of training techniques such as pruning, trimming, wiring and defect correction are commonly used. These variously depend on the historical periods. So, this paper studies the change and development of these, especially pruning and wiring.

Pruning, the traditional method of training Bonsai (potted trees), is used for correcting tree forms or postures as well as for retarding natural growth. During the Ming and Qing Periods, the method of cutting off downward-growing branches, inward-growing branches, branches that cross each other, as well as weakened and withered branches was developed.

Wiring, a relatively modern method of training Bonsai (potted tree) trunks and branches into the desired forms began in the late Qing Period. Hemp-rope binding was used in the Tang Period and Palm-rope binding was used in the Ming Period before the use of wiring.